

M H F 魔人

第2章



MHFを含めオンラインゲームではしばしば「オフ会」が開かれる
オンライン上で仲の良くなった人達がオフライン、つまり現実世界で集まるのだ。

私は今まで現実世界でほかのハンターに会ったことはなかった。
ひとみしりがはげしい上、何か危険にさらされるのではないのか？
と勝手に想像し敬遠してきた。

しかし今回MHFの廃人を取材するに当たってついに現実のハンターに会えることになったのだ。
団長のデュラさんに取材をしたあと次はどういった方法で誰に取材をしようか迷い途方に暮れていたところ

「俺の知り合いにもものすごい廃人がいるから、話を聞いてみる？
なんならリアルでも取材おkかもよ！」

デュラさんがすごくありがたい提案をしてくれた。
当然私は感謝し、すぐに話を進めてもらった。
そうして今、近所のネットカフェで廃人ハンターを待っている。
最近のネットカフェ(=ネカフェ)は、24時間営業のところが多く
中にはMHFが快適に動かせるPCを十数台設置しているところも少なくない。

今回取材させていただく予定の廃人ハンターに指定された待ち合わせ時間が深夜3時であるのと
あわよくば廃人のレベルを生で確認したいという私の強い要望から、
PC環境があり24時間営業しているこのネカフェで待ち合わせることにしてもらったのだ。

それにしても深夜3時だとネカフェにいる人達も個室で眠っている人が多く
オープン席にいるのは私を含めて2人しかいない。
まさかこんな静かなところで初の現実世界のハンターに取材をすることになるとは思わなかった。

そしてデュラさんの知り合いとは言えどこかに連れ去られてしまうこともありえなくはない。
私がもし普通の状態だったら、少しでも不安要素がある現実のハンターに会うことなど
おそらくなかっただろう。

しかし今は違った。1%くらいは自分の命がなくなることも考えながら緊張して待っていると

「miruさんですか？はじめましてデュラガウアのフレです」

河合知夏(仮名)は現れた
取材時の季節は初春とはいえ時間は深夜の3時。
河合は膝まである白いコートを颯爽と着こなしており
端正な顔立ちに長い髪が似合うとても美しい女性だった。

「こんばんわ、はじめましてmiruです。まさかあなたみたいな綺麗な人が
MHFをやっているなんてびっくりしました。」

「ははは、わたしはmiruさん以上にそう思ってますよ。」

まさかあなたような人が来るなんて予想してなかったものですから。
失敗したな～こんなことなら……」

軽い雑談をかわしたあと、緊張がとけた私はMHFについて質問をし始めた

彼女もデュラさんと同じでやはり猟団長らしい。

ただし1か月前に猟団を作ったばかりで団員は今のところ少数精鋭だそうだ。

それでも猟団ランクは12までいっていてプーギーは3匹とも

利用価値の高い服を着させているというなんとも廃人らしい猟団作成スピードである。

「miruさんもデュラの猟団からわたしの猟団にうつる？ 今はまだ難しいけれど半年以内には狩人祭の1位をとる自信はあるよ」

半年後には私はいないかもしれないことは言えなかった。デュラさんも約束どおりフレに黙ってくれていたようだ。

話しを進めているうちに彼女の武器作成スタイルの話題に移った。

彼女の場合新規武器はとにかく誰よりも早く作ることを目標にしているとのことだった。

勝負はアップデート数週間前から始まる。

まずMHFアップデートのプレビューサイトをくまなく見る。

そこで新しい武器が発表or隠れているのを探す

さらにアップデート直前に発売されるMHFの攻略本。

その攻略本の正式な発売日より前に

フライングでネット上に情報が流れるのを探す。

そこで今回のアップデートではこんな武器が実装されるのだと

わかったら、そこからすぐに武器作成に必要なと思われる素材集めに向かうのだ。

しかしMHFの場合武器を生産する「素材」がアップデート前にわかることはまずありえない
アップデート直前に発売される攻略本にも武器のグラフィックや性能は記載されているのだが、
その武器を作るのに必要な「素材」は一切記載されていない

「miruさんもそうだと思うけど武器のフォルムと名前を見たら
なんとなくどんなモンスターの素材が必要かわかるじゃない？
だからどんな素材が必要なのか正確にわからなくてもそれらしき素材を全力で集めるの」

彼女は笑って簡単にそう言って見せたが実際にどの素材がいくつ必要なかわからない時に
全力を出すのは精神的にすごく疲れる。

しかも自分がほしいと思う武器数は
アップデート毎に少なくとも10種類以上あるとのことだ。
フライング情報が流れるのは早くても
アップデートの2日前だというからそこから2日間は眠らない。

「実家暮らしで『職業：家事手伝い』だから2日くらい眠らずに
ゲームに没頭していても大丈夫！」

両親も娘がゲームをやり続けることには理解のある人なのだそう。
武器10種類以上の生産素材を予想の情報だけで眠らずに集め続ける。
そんなことを平気でやってのける彼女はまぎれもなく廃人なのかもしれない

「剛種のヘビィボウガンが実装される直前の時はかなりキてたかな(笑)
剛種ヘビィ自体はプレビューサイトでの発表だったからアップデート3週間前には発表されていたけれど、
正直何十枚「証」が要求されるか見当もつかなかったからすごく心配だった。
霞龍の証と舞雷竜の証をいくら集めても心配で終わりがなかったのにもかかわらず、
アップデート直前にまたフライング情報を見たらさらにほしい武器が15種類もあって
もう死んじゃうかと思った。そうして、いざ蓋をあけてみると
剛種ヘビィの生産素材に狼の証が必要だったので大泣きしたのはナイショデス」

早く武具をつくると言っても人によってその時間には差があるが河合知夏の場合は誰よりも早く作るということに意味
があるらしい

「剛種武器でも普通の武器でも実装されたその日に作らないと満足できないの
わたし以外はまだ誰も作ってないであろう武器を持って広場を歩いている時に、
私の個人ステータスを見に寄ってくる人達をみるのがとても楽しいし嬉しいの」

他のオンラインゲームもそうだがMHFもキャラクター同士が近寄ると
その人のステータスをすぐに見ることができる。
そういった私たちがなんでもないと思うシステムも
彼女を廃人にさせるシステムの一つなのかもしれない。

最後にネカフェのPCを使い

自慢の装備を見せてもらうことにした。
今まで自分以外の人がMHFをプレイしている画面を
見たことはほとんどなかったので新鮮な気持ちになった。

そして剛種武器がコンプリートされている装備画面を初めてみた。
ひとつひとつの武器を紹介しながら、
これにはこれの専用装備を作っていると終始彼女は目を輝かせながら言っていた。

極めつけは「ハーヴェスト装備」に「太公望」を背負った究極のマゾ装備。
「どちらも実装3日以内には作ったかな太公望の方がハーヴェストよりも
全然きびしかったけどね超激運のお守りがなかったらもっと時間かかったかも」

とその時ふいに後ろから男性の声がした。

「オマエら楽しそうにしゃべりすぎなんだよな」

一瞬体が凍りついたどうやら私たち以外にそこにいたもう一人の人に話かけられたようだった。深夜に楽しくおしゃべりをしていた(その人にはそう見えた)のはどうやら不愉快に思われたらしい。

凍りついた私の体と対照的に男はどんどん私たちに近づいてきて河合知夏の横の席に無造作に座ると私に向かってこう言い放った。

「はじめましてmiruさん
デュラガウアこと鈴木雄介(仮名)です」

先ほどまでの恐怖と驚きと安心感がいりまじり一瞬心臓がとまるかと思った。まさかこんなところでデュラさんに会うことになるとは

「あまりに二人が楽しそうだから俺も一緒に狩りたくなってきちゃったよ」
「もう～話しかけないって約束したでしょ、だからあなたを連れてきたくなかったのよ」
「ひとりではあぶないかもしれないって言ったのは知夏だろ？」
「だったらmiruさんの外見を見ただけで危険じゃないってわかったでしょ？
その時帰ればよかったのよ。ほんとはかわいい子とただおしゃべりしたかっただけじゃない
あなたを連れてきてやっぱり失敗したな～って思ったわよ」
「あの～お二人は恋人同士か何かですか？」
「まあそんなところだね。MHFと一緒にできる恋人って素敵だよ。
まあ知夏の場合は廃レベルすぎて俺でもちょっとひいちゃうけどね」

痴話げんかを聞きながらわたしたち3人は夜明けまで狩り続けた。
そのあとネカフェで朝食を食べながら、
次に取材する廃人さんにこころあたりがないかどうか河合知夏に聞いてみた。

「そうだね～今現在はわたしの周りにはそういう人はいないかな～
もっともわたしの猟団は入魂数とか見てもすごい人がいっぱいいるから実は廃人ばかりなのかもしれないけどリアルでのこういう取材はむずかしいかもしれないね～」

「そうだよな～俺もmiruさんと同じ猟団で普段からたくさん君に接することがなければおそらく
今回のことは承諾しなかったもんな」

「そうですか、それは残念です」

「あ！でも昔すごい廃人と同じ猟団だったことがあるからその話でもしょうか？それで一人取材したことにしちゃえばいいんじゃない」

「おお！ありがとうございますぜひ聞かせてくださいもしかしてその方は進化武器をコンプリートしちゃったりしてま

すか？」

「いや、そのハンターは進化武器が実装される前にいなくなっちゃったの
当時その人の廃っぷりは本当にすごくて、
もう彼がMHFそのものだったと言ってもいいくらいの存在だった。
武具はもちろんのこと通り名だってコンプリートしていたもの。
でもね、噂とかまず間違いないんだけど眠らずにMHFをプレイし続けた結果、
プレイ中に死んじゃったみたいなの。
韓国では結構あるみたいけど日本ではめずらしくて新聞にも載ってたよ。
ああ～この人が彼なんだなって思った。
でもわたしに言わせて見れば彼は真の廃人ではなかったのかもね。
本当にMHFが好きなら死んだりなんかしないもの。死んだらMHFができなくなるんだから
そこは気をつけないとね。
わたしは彼のようににはならないしたとえ彼以上にプレイし続けても
MHFへの愛があるからきっと死なないわね
交通事故にあっても本当にMHFへの愛があれば死なないんじゃないかな～
愛が足りなくなったから彼も神様に見放されたのかもね
あ！そんな彼の廃エピソードなんだけど……………」

「知夏！！」

「え？なに？」

彼女はなにごとなのかと驚いたようで私から視線をそらし鈴木雄介を見た。
私の心は悲しさで埋めつくされとても平静を保っていられる状態ではなくなっていたので
その場から去ろうと思いき彼女の横顔に向かってお礼を言った。

「河合さん、彼は最後どういう気持ちで亡くなったんでしょうね
取材へのご協力ありがとうございました」

私は必死に我慢したが涙が止まることはなかった
朝食のパンはふやふやになっていた

「miruさん！ごめん！知夏には話してないんだ！ 悪気があったわけじゃ…」
とても申し訳なさそうな表情、声、態度で鈴木雄介はそう言ってくれた。

「ええ……わか…てます」

「いったいどういうことなの??」

「知夏、あのな、miruさんは……あと数カ月の命なんだ」

「MHFへの愛は……ひと一倍……つもりなんですけど…ね……」
うまく言葉が出てこなかった。河合知夏は目に涙を浮かべ、口に手をあてながら
自分が言い放った言葉を反芻しているようだった。

「嘘……………私なんてことを……………」

一所懸命に私に向かってごめんなさいごめんなさいと繰り返しあやまりながら
河合知夏が大粒の涙を大量に流し始めた。

私はその光景に耐えられなくなりネットカフェをあとにした。